墓室壁面に取り付く鉄製品の使用方法の試論

新 美 祥 人 夢

2026年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

墓室壁面に取り付く鉄製品の使用方法の試論

新美祥人夢

はじめに

古墳時代中期以降の横穴式石室あるいは横穴墓の壁面に、なにかをつり下げるあるいは、垂らす役割を果たす鉤状の鉄製品が存在する。本稿では、その鉄製品に着目し、製品の特徴や埋葬空間内での用いられ方などに着目し、墓制にどのように組み込まれていったのか検討する。なお、本稿で用いる部分名称は図１に準拠する。(注1)

１．研究略史と今日の課題

大塚初重氏の研究　掛金具の研究は、大塚氏が綿貫観音塚古墳の玄室奥壁と左右壁面に「釣鉤」（掛金具）が挟み込まれていることを発見したことに始まる。大塚氏はこの遺物に布が付着していたことから遺体の上に布を張る天蓋のようなものがあったことを想定した（甘粕・大塚1970）。

菅谷文則氏の研究　菅谷氏も大塚氏と同様に、掛金具に付着した有機質などを根拠にその使用用途に壁面装飾用の布を懸垂するためのものを想定した（菅谷1971）。

村田文夫氏の研究　村田氏は当時の日本列島内出土の資料を集成し、横穴式石室のみではなく、横穴墓からも転用品として壁面に取りつく事例があることを指摘した。また、使用用途については大塚氏、菅谷氏と同様に布を懸垂するものを想定した（村田1995・2000）。

右島和夫氏の研究　右島氏は村田氏の研究成果を踏まえ、日本列島のみならず朝鮮半島、中国での発掘調査の事例を加え、東アジア全域での資料の集成を行った。使用用途について、６世紀代の前二子古墳・藤ノ木古墳・甲山古墳・観音山古墳・観音塚古墳・城山１号墳に関して、「確実に布幕を懸垂するもの」と位置付けた。また藤ノ木古墳・甲山古墳・観音山古墳・観音塚古墳から出土した製品を形状から転用品ではなく、石室構築の際に製作した「特注品」として位置づけた（右島2011）。

今日の課題　掛金具の研究はおおむね発見時の大塚氏の指摘から資料に遺存する有機質などを根拠に「布幕を懸垂するもの」といった認識が強い傾向にある。特に右島氏の研究

は、埋葬空間内の掛金具の使用用途を言及し、朝鮮半島、中国まで含めた体系的な研究として一つの到達点といえよう。しかし、近年に福井県向山１号墳や兵庫県雲部車塚古墳など、古墳時代中期の段階においても石室内に掛金具が用いられる事例が確認され、右島氏の研究で取り扱った資料よりも年代が遡る事例が増えつつある。中でも向山１号墳は本州最古級の横穴式石室を有する古墳として重要であり（花園大学考古学研究室2015）、埋葬空間内の構成も前段階までと異なることが想定できる。これらの新資料を踏まえ、本稿では製品の形状と用いられ方を提示することによって、掛金具を有する埋葬施設空間内での使用方法と変化について言及する。

なお、本来石室に取りついていたものが経年変化などによって、壁面から落ちることで床面からの出土遺物と混雑している資料があることも想定されるが、それら製品の特定まで筆者の力量が及ばないため、本稿では壁面に取りついている状態で出土した製品と出土状況で壁面に取りついていたことが想定される製品のみを対象とする。

２．製品の形状と製作方法

本節では頭部の側面形状によって分類し、各分類の製作方法を想定する。

（１）形状

頭部の形状を重要視し以下の四つに分類した。なお、研究史でも触れたように掛金具は、大きく分けて石室構築の際に製作するものと鉄鏃などを転用するものがある。また、付着する有機質は木質と繊維質の二つが確認される。

①U字形…頭部が脚部に向かって曲がり、側面形状がU字形を呈するもの。

②L字形…頭部が脚部に向かって90°近く折れ曲がり、側面形状がＬ字形を呈するもの。

③円環形…U字形と同じく、頭部が脚部に向かって曲がるが、U字形より頭部端部の反り返りが強く頭部側面形状が円環形を呈するもの。

④乙字形…頭部の側面形状が乙字形を呈するもの。

（２）製作工程

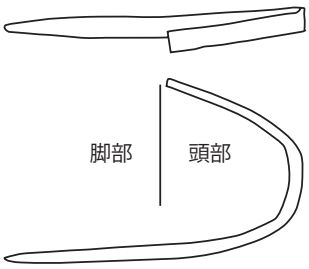


図１　掛金具の部分名称図

製品によって第３工程の細部や用いられる道具は異なるが、おおむね以下の手順が考えられる。

１段階：材料調達

２段階：鍛鉄

３段階：脚部・頭部成形

２段階までは転用品を掛金具とする事例でも同じものが想定でき、３段階以降は形状によってわかれることになる。

U字形は、棒状のものを押し当てながら叩き、頭部を形成する。円環形も同じく棒状のものを押し当てながら頭部を形成するが、径が小さいものが多く、U字形に比べ、押し付けるものが小さい。L字形は直角の角に押し当てる。あるいは何も押し当てずに頭部を成形することが想定される。

３．掛金具と掛金具に転用した製品を有する事例

本稿での分析対象は24遺跡のうち、竪穴式石室１遺跡、横穴式石室の掛金具は11遺跡、横穴出土事例は12遺跡である。分析の対象範囲は日本列島全域に及ぶ。また、朝鮮半島の資料も５遺跡取り上げる。以下では出土位置がわかる代表的な遺跡の概要とそれぞれの出土位置について確認する[注2]。なお、いわゆる特注品（右島2011）だけではなく、鉄鉾・鉄鏃・鉄鎌を壁面に取り付けて転用品を掛金具として使用する一群についても言及する。

（１）日本列島内での事例（図２、付表）

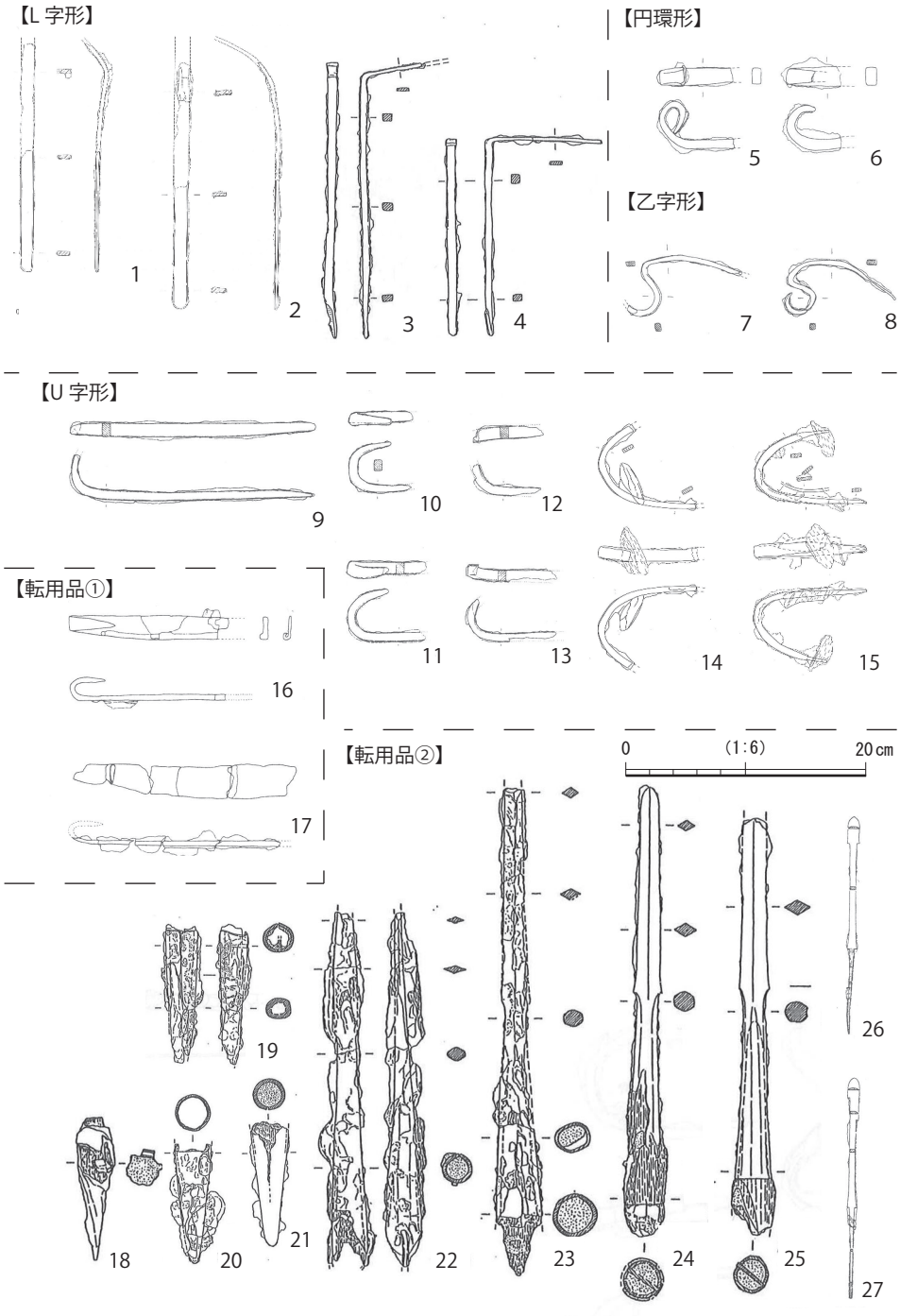
兵庫県雲部車塚古墳　５世紀中葉の古墳で、掛金具が出土する石室では唯一の竪穴式石室である。掛金具の正確な本数については不明であるが、石室内を描き記した絵図（八木1901）には壁面に満遍なく取り付けられて、武器を掛けているのが記されている。報告書内では２点確認されている（１・２）（有馬ほか2010）。

福井県向山１号墳　横穴式石室を有する５世紀中葉の前方後円墳である。掛金具は合計５点の出土が確認されており、いずれも床面からの出土で、製品にも木質や漆膜が付着している（14・15）。石室奥壁左隅に置かれていた板甲の中から、掛金具に伴って石突が出土していることから壁面に掛けていた武器が落下したものと考えられる（花園大学考古学研究室2015）。

群馬県前二子古墳　県内では最古級の横穴式石室を有する６世紀前半の前方後円墳である。掛金具は13点（５・６）出土しており、他の古墳と比較して出土量が多いことが特徴である（高崎市教育委員会1992）。前二子古墳出土の円環形のものは内径１～1.5㎝と刀剣類等の武器類を横から入れ込むのにはやや小さい規格である。そのため、（立て）掛けるのではなく布のようなものを掛け吊るすことが想定できる。この様に特注品とされる製品についても製作段階で使用用途を意識していることが窺える。

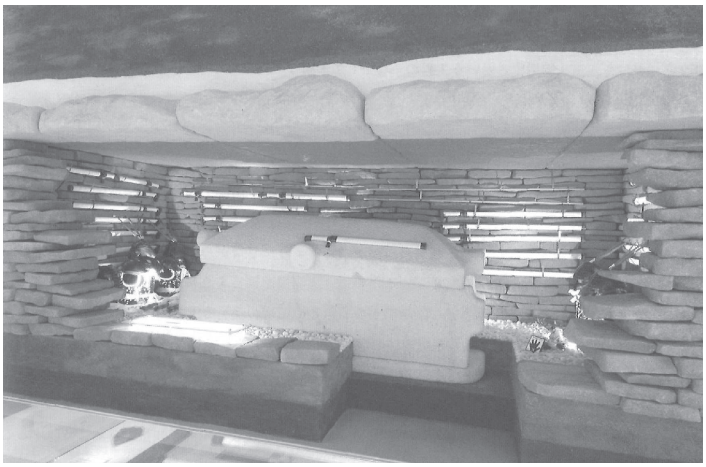
奈良県藤ノ木古墳　６世紀後葉の円墳である。U字形の掛金具が６点出土している（９～13）。壁面奥壁と左右壁に取り付けられた状態で出土した（松田ほか1990）。

群馬県観音山古墳　６世紀後葉の前方後円墳である。乙字形の掛金具が奥壁と左壁に取り付けられた状態で出土した（７・８）。頭部には繊維製の有機物が付着しており、布幕を垂れかけていた可能性が考えられる。なお、乙字形の掛金具は本古墳でしか出土していな

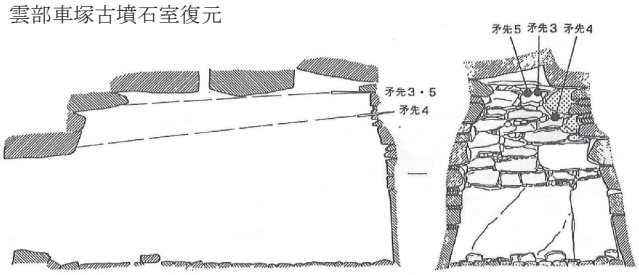


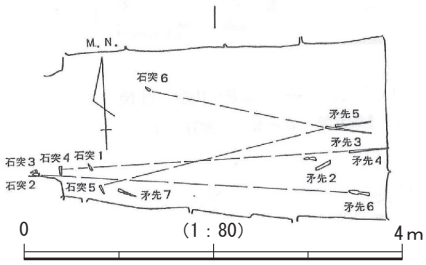
1・2 雲部車塚　3・4 甲山　5・6 前二子　7・8 観音山　9～13 藤ノ木　14・15 向山１号
16・17 城山１号　18～21 番塚（石突）　22～25 番塚（矛先）　26・27 物集女車塚（鉄鏃）

図２　掛金具の諸例（Ｓ＝1/6）

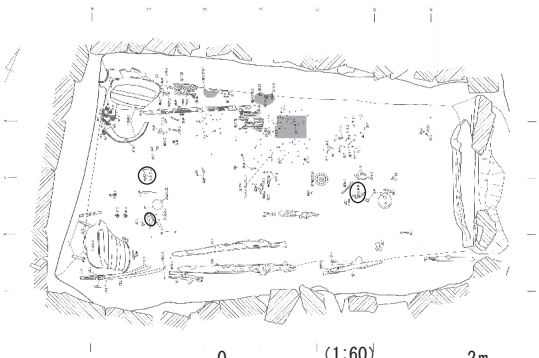


1．雲部車塚古墳石室復元



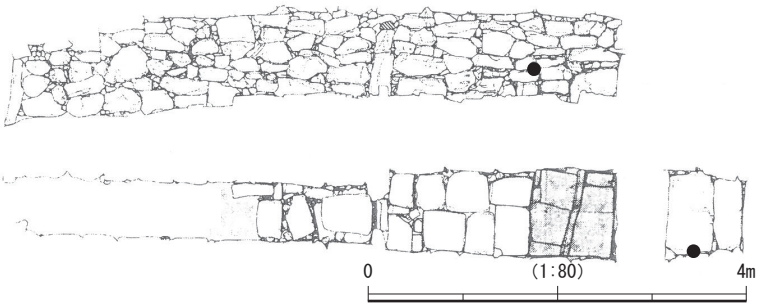


2．番塚古墳

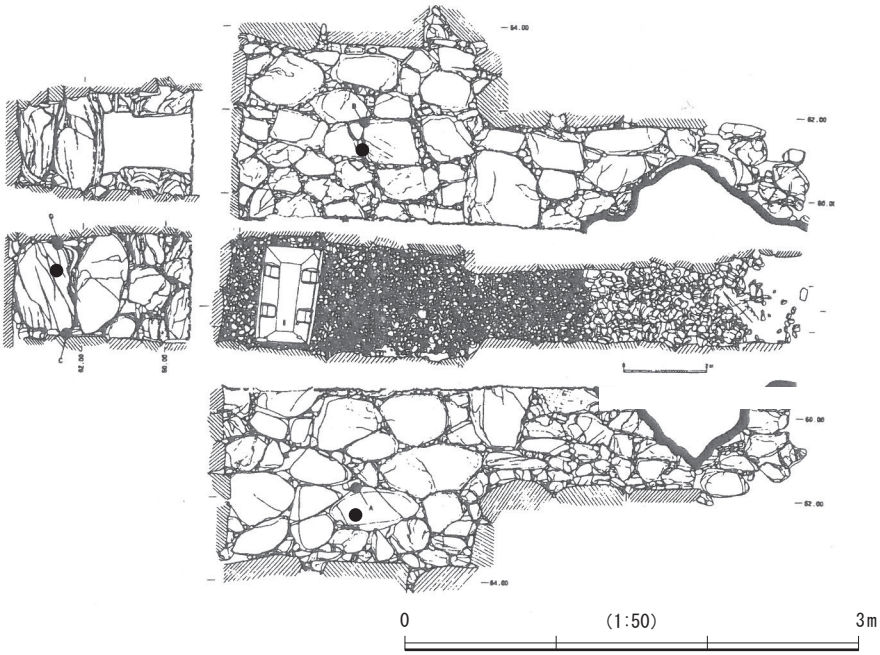


3．向山１号墳

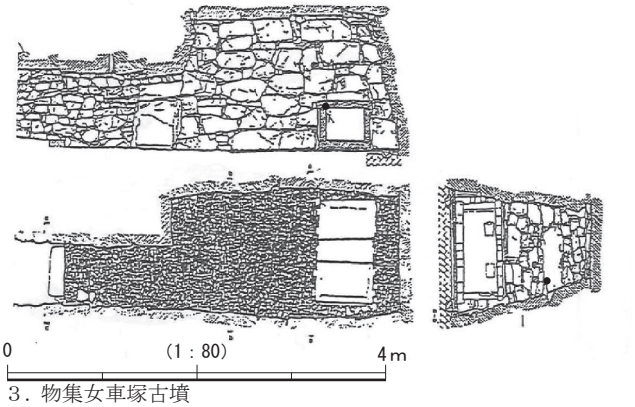
図３　掛金具出土石室の諸例（１）　掛金具の位置を３のみ○で示す



１．前二子古墳



２．藤ノ木古墳



３．物集女車塚古墳

図４　掛金具出土石室の諸例（２）　●は掛金具の位置を示す

い。

壁面に鉾を突き刺す事例　福岡県番塚古墳と大阪府南塚古墳の２例は、壁面に鉾を突き刺してる状態で確認されている。番塚古墳は横穴式石室を有する前方後円墳である。石室の奥壁に鉾が差し込まれる形で発見された(18～25)。鉾の長さから考えると前室から奥壁に向かってかけ渡していることが想定される（九州大学考古学研究室1993)。南塚古墳は、前壁に刺さった状態で１点出土した。石突が見つかっていないため、長さは不明である。

転用品を用いる事例　京都府物集女車塚古墳は鉄鏃を石室奥壁の右寄りに並んで２か所と石室両側面に各１か所ずつ確認できる（26・27）（山中ほか1988)。千葉県城山１号墳は鎌か刀の先端を転用したと考えられる事例である（16・17）（丸子ほか1978)。形状はU字形のため、掛金具にするための再加工が施されていることが想定できる。

横穴墓の事例（図２、付表）　横穴墓については、鉄鏃の転用事例が大半を占めるが、一部鉄鎌などを転用する事例も認められる。また、中田甌穴墓群第８号墓で31孔（菅原1971)、追戸地区横穴墓群第２号では４孔（氏家1968)、溝口西耕地横穴墓群第１号墓では３孔(村田2000)の３事例については、直接壁面に掛けられていた状態では確認されておらず、壁面に取り付け痕が認められる事例である。なお、横穴墓で掛金具を有する事例の分布は関東地域と東北地域に偏る。

（２)朝鮮半島の事例(図６）

朝鮮半島での資料は本稿では５例取り上げるが､その内２例(福泉洞11号･巨濟長木遺跡)は掛金具ではなく、鉄鉾・鉄ヤリを壁面に差し込む事例である。

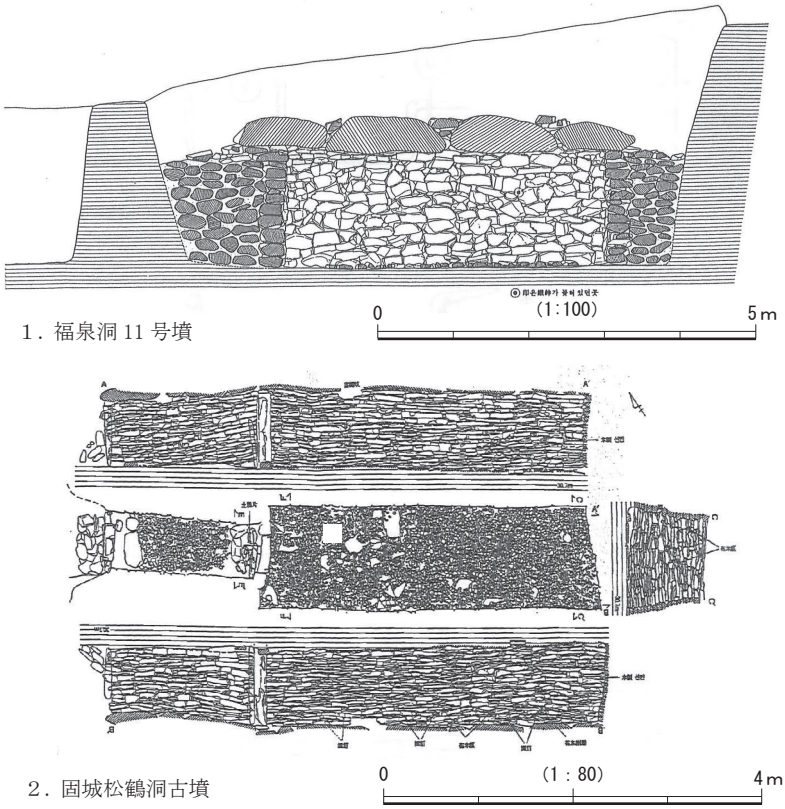
固城松鶴洞１Ｂ１号墳は築造時期が６世紀前半の古墳である(昌原文研2005)。石室長約10m、玄室長約７m、玄室幅2.1m、玄室高1.6mを測る。掛金具は断面形状が方形を呈し、先端に向かって反り返る。奥壁と右側面から壁面に刺さった状態で出土した。

福泉洞11号墳と巨濟長木古墳（慶南2006）の事例は、壁面に鉄鉾を差し込む事例である。福泉洞11号墳は５世紀前半の竪穴式石室で、両側壁から鉾が挿し込まれた状態で出土した。鉄鉾には繊維が付着していたことから布幕を掛けられていたことが想定される（釜山大学校1983)。

以上、本稿で主に取り扱う遺跡について掛金具の形状と出土位置等の情報を概観した。

４．掛金具が用いられる埋葬施設の分類

掛金具には２節で確認したように個別に製作されるものと鎌や鉄鏃を転用した事例があり、掛けるといっても古墳ごとに製品のバリエーションが認められる。おおむね個別に製作されたものについては、四つの形状にわかれる。取り付ける位置も様々であるが、共通



１．福泉洞 11 号墳

２．固城松鶴洞古墳

図５　掛金具出土石室の諸例（３）

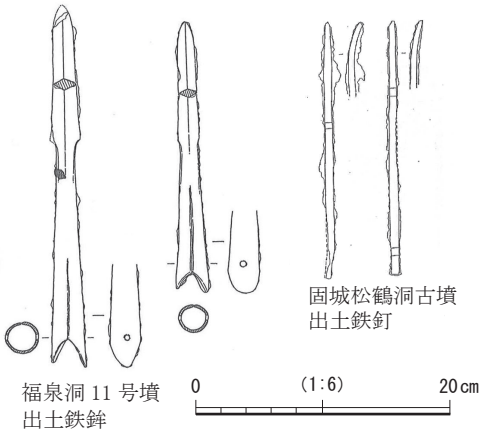


図６　出土遺物

して天井に近いところに取り付ける事例が目立つ。

このことを踏まえ、本節では掛金具が用いられる日本列島内資料の埋葬施設を以下の三つに大別する。

Ａ類　竪穴式石室の壁面に掛金具を取り付ける一群である。

Ａ１類：L字形の掛金具を用いて石室前面に取りつけるもの。

Ｂ類　横穴式石室の壁面に掛金具を取り付ける一群である。用いられる形状と取り付ける壁面の数によって以下四つに細分する。

Ｂ１類：U字形の掛金具を用いて石室の側面にのみ取り付けるもの。

Ｂ２類：U字形の掛金具を用いて石室の３面以上に取り付けるもの。

Ｂ３類：円環形の掛金具を用いて石室の３面以上に取り付けるもの。

Ｂ４類：２種類以上の掛金具を用いて石室の３面以上に取り付けるもの。

Ｃ類　武器などを転用品として壁面に掛金具として取り付ける一群である。

Ｃ１類：鉄鉾を壁面に差し込むもの。

Ｃ２類：鉄鏃や鉄鎌、鉄釘を壁面に取り付けるもの。

Ａ類は雲部車塚古墳でしか確認できない。Ｂ類は横穴式石室に用いられる事例であり、石室内に取り付けられる配置と掛金具自体の形状によって四つに細分する。Ｂ１類は初現資料は向山１号墳が該当する。藤ノ木古墳も同じく、U字形の掛金具を用いるが、壁面に取り付ける位置がＢ１類と異なるため、Ｂ２類を設定した。Ｂ３類は前二子古墳の一例のみで、Ｂ４類も同じく観音山古墳の一例のみである。

Ｃ類は鉾といった長柄の武器を壁面に直接挿し込む事例と鉄鏃、鉄鎌といった掛金具として機能するものを転用する二つに分かれる。両者の間では、出土する位置や転用品自体の属性から用いられ方に差があることが想定される。Ｃ１類は番塚古墳と南塚古墳に認められる。また、朝鮮半島では福泉洞11号墳や巨濟長木古墳などで確認できる。Ｃ２類は横穴墓が大半を占めるが、横穴式石室でも物集女車塚古墳で一部確認できる。

５．変遷

前節では掛金具が石室に用いられるパターンを確認した。以下では、大きく古墳時代中期と後期に分けて、その変遷を考えたい（図７）。

（１）古墳時代中期

本段階は列島内で掛金具の確認できる最古の段階である。まず最古の事例はA類・Ｂ類の出現時期である。A類の資料もしくは雲部車塚古墳、最古のＢ類の資料は向山１号墳である。本事例は掛金具本体に木質が付着するほか、板甲の中から掛金具に伴って石突が出土することから石室側壁面側に鉾といった武器類を掛けていたものが時間経過とともに落下した可能性がある。この使用方法を裏付ける資料は、A類である雲部車塚古墳の事例である。本事例は､絵図でも残っているように石室に武器を掛けていたことが確認できる（八木1901）。両古墳とも古墳時代中期中葉頃の古墳であり、日本列島の掛金具の出現期には、石室側面に武器を立て掛ける方法で用いられていたようである。後に出現するのは、番塚古墳のＣ１類である。本古墳の出現時期は壁面に直接鉾を差し込むといったことから、掛金具を用いる前述した２例との関係を想定することは難しい。本古墳は巨濟長木古墳の石

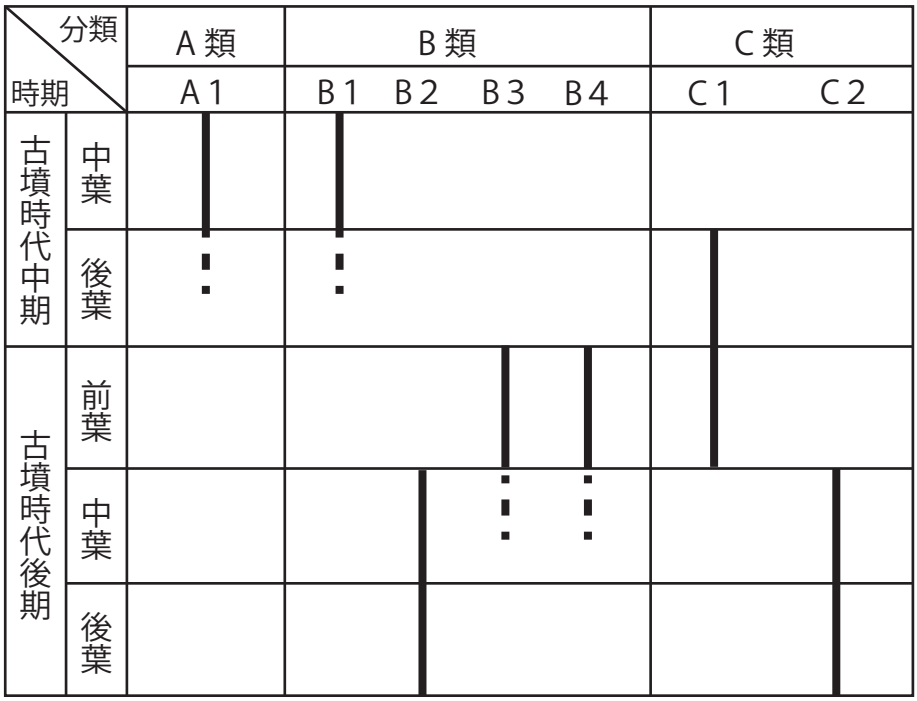


図７　各モデルの存続時期

室形態との関係も指摘されており（洪2007）、朝鮮半島の文化の影響を示唆する。

これらのことから古墳時代中期の段階では、石室内に何かを掛けるといった思想は、朝鮮半島から伝わったものと思われるが、列島内で武器を掛けるといった形で表現された可能性がある。その後、そのような用いられ方は一旦断絶し、番塚古墳のようなＣ類が出現する。この使用方法は前述したように朝鮮半島の資料でいくつか確認されており、朝鮮半島からの影響をダイレクトに反映し、日本列島に出現するものと考えられる。

（２）古墳時代後期

古墳時代後期になると列島内での事例は、３面以上の壁面に取り付ける事例が増加する。また、横穴墓に用いられるケースが多いＣ２類が出現する。Ｃ２類には用いられる掛金具に布が付着する事例が多い。明確に掛金具に対して武器を掛けていたと考えられる事例は、形状と出土位置から中期中葉のＡ１類とＢ１類でしか認められない。これらは本段階では前段階までの用いられ方とは異なっていることがわかる。

その背景には後期中葉までの段階では右島氏の指摘（右島2011）にもあるように半島からの影響が考えられるが、後期後葉以降の横穴墓に用いられる事例は分布にも偏りがあることから、地域独自の墓制として組み込まれていった可能性がある。

（３）画期の設定

以上の内容を踏まえ、以下の三つの画期を設定する。

第１画期(古墳時代中期中葉)…日本列島において掛金具の出現期

第２画期(古墳時代中期後半～末)…Ｃ１類の出現期

第３画期(古墳時代後期中葉～後葉)…Ｃ２類の出現期

最初の画期は古墳時代中期中葉で日本列島に掛金具が出現する段階である。日本列島内ではごく限られた資料でのみ確認され、朝鮮半島での墓制が影響している可能性を指摘した。

第２の画期はＣ１類の出現である。本段階では、半島からの影響を強く受けていることが考えられる。これは石室形態からも指摘されている(洪2007)。

第３の画期はＣ２類の出現時期である古墳時代中期中葉以降である。Ｃ２類の出現以降は、前段階まであった他のパターンは藤ノ木古墳を例外としてほぼ消失する。分布も一部の地域に偏る。本段階になると限られた地域の墓制として定着した可能性が高い。

おわりに

本稿では掛金具の形状による分類、掛金具が伴う石室の類型化及び変遷についての検討を行った。初現期の資料として向山１号墳と雲部車塚古墳を例に挙げ、古墳時代後期へのつながりについて言及したのは先行研究ではなかった視点であろう。初現期の使用方法はＡ・Ｂ類といった武器に意味を持たせて使用する例となっており、朝鮮半島から伝わった思想が列島内で独自の文化として受け入れられた可能性を指摘した。また、多くの課題を残した。初現期に該当する資料が上記の２例しか現状確認できないため、日本列島内の初現期から後期に関する議論は今後類例の増加を待つ必要がある。今後は床面から出土している遺物の中に掛金具が混在していないか、出土位置の検討を経て、石室の構築論に加え伝播論などを踏まえ、より詳細な埋葬施設内の空間構造把握に努めるとともに武器本体に関しても古墳時代の中で果たした役割について考えていきたい。

（にいみ・あとむ＝当調査研究センター調査課調査員）

謝辞　本稿の執筆にあたり、業務が多忙な中にも関わらず、資料調査に対応していただいた各機関の方々、議論に付き合っていただいた多くの方々、何より私が１回生の時に４回生で当遺物のことを研究されていた安齋愛氏には、在学中に多くのご教授をいただきました。私が武器・武具の研究を志すきっかけをくれた人物の一人でもあります。文末に記して感謝の意とさせていただきます。

注１　本製品の名称はそれぞれの研究者が「釣り下げる」ことに特徴を見出し、「釣金具」あるいは報告書ごとに異なっており（有馬ほか2010、花園大学考古学研究室2015）、共通名称が定まっていな状況にある。本稿では、後述する初現期の向山１号墳の資料で、武器を立掛ける事例の特性を重視し、「掛金具」と名称する。その場合、用途を限定しないため釣金具といった名称とも鉾盾しない。

注２　石室左右の表記は手前側から奥壁に向かっての左右とする。

図出典

図１・６・７、付表：筆者作成

図２～５：各報告書記載の図を引用し、一部加筆。

引用文献

旭志村教育委員会 1997『尾足横穴墓群甲号横穴発掘調査報告書』

有馬　伸・池田正雄ほか 2010『雲部車塚古墳の研究』（兵庫県立考古博物館研究紀要第３号）

いわき市教育委員会 1968『装飾壁画のある中田横穴』1969　中田横穴保存会

いわき市教育委員会 1971『舘山甌穴墓群』

氏家和典 1968『仙台湾周辺の考古学的研究』（宮城県の地理と歴史第３集）宮城県教育大学歴史研究会

甘粕　健・大塚初重ほか 1970『シンポジウム古墳時代の考古学』　学生社

九州大学文学部考古学研究室 1993『番塚古墳』（苅田町文化財調査報告書第 20 集）

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・深沢敦仁 2004『多田山古墳群』多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第１集

久地西前田甌穴墓群発掘調査団 1998『久地西前田甌穴墓群―第二次調査―』

慶南発展研究院歴史文化センター 2006『巨濟長木古墳』

洪　潽植 2007「韓半島南部地域の九州系横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』（日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会Ⅰ記録集）

国立昌原文化財研究所 2005『固城内村里古墳群Ⅱ』

菅原文也 1971『中田横穴墓群』いわき市史別冊

菅谷文則 1971「横穴式石室の内部―天蓋と垂帳」『古代学研究』59　古代学研究会

高崎市教育委員会 1992『観音塚古墳調査報告書』

玉川文化財研究所 1986『川崎市内における横穴墓群の調査』

花園大学考古学研究室 2015『若狭向山１号墳』

福島県教育委員会 1979『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告６』福島県文化財調査報告書 220 集

釜山大学校博物館 1983『東萊福泉古墳群Ⅰ』（釜山大学校博物館遺跡調査報告第５輯）

松田眞一ほか 1990『斑鳩　藤ノ木古墳』第一次発掘調査報告書　奈良県立橿原考古学研究所

丸子 亘ほか 1978『城山第一号前方後円墳』　千葉県香取郡小見川町教育委員会

右島和夫 2011「横穴式石室の鉤状鉄製品」『古文化談叢』第 65 集（４）

村田文夫 1995「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛－壁内に打ち込まれた吊金具と連続三角文からの推理－」『みちのく発掘　菅原文也先生還暦記念論集』
村田文夫 2000「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛・その後」『民族と考古の世界』和田文夫先生頌寿記念論文集刊行会
八木奘三郎 1901「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」『東京人類學會雜誌』第 17 巻第 189 号
山中　章ほか 1988『物集女車塚古墳』（向日市埋蔵文化財調査報告書第 23 集）

付表　掛金具出土古墳一覧

タイプ	所在県	古墳名	年代	墳形・規模（m）	石室形態	出土点数	出土位置	形状	備　　考
Ａ１類	兵庫県	雲部車塚古墳	５世紀中葉	前方後円・140	竪穴式石室	多数	４方の壁全て	L 字形	報告では２点
Ｂ１類	滋賀県	甲山古墳	６世紀中葉	円・30 以上	横穴式石室	4	石棺付近	L 字形・U 字形	詳細な出土位置不明
Ｂ１類か	福岡県	桂川大塚古墳	６世紀中葉	前方後円・78	横穴式石室	2	不明	L 字形・U 字形	
Ｂ２類	福井県	向山一号墳	５世紀中葉	前方後円・48.6	横穴式石室	5	床面	U 字形	５点のち１点は板甲内で石突と共に出土
Ｂ２類	奈良県	藤ノ木古墳	６世紀後葉	円・50	横穴式石室	5	奥壁・左右壁	U 字形	奥壁２点・左右壁１点ずつ
Ｂ２類	群馬県	観音塚古墳	６世紀末～７世紀前葉	前方後円・105 以上	横穴式石室	3	左壁	U 字形	左壁１点
Ｂ２類か	千葉県	城山１号墳	６世紀後葉	前方後円・68	横穴式石室	2	玄室入口	U 字形	鎌か刀の先端を転用した可能性が指摘
Ｂ３類	群馬県	前二子古墳	６世紀前半	前方後円・94	横穴式石室	19	奥壁	円環形	奥壁２点・左右壁１点ずつ
Ｂ４類	群馬県	観音山古墳	６世紀後葉	前方後円・97	横穴式石室	4	奥壁・左壁	S 字形	奥壁２点・左壁２点
Ｃ１類	福岡県	番塚古墳	５世紀末	前方後円・50	横穴式石室	3	奥壁	矛を転用	壁面に取り付けた状態で出土
Ｃ１類	大阪府	南塚古墳	６世紀前半	前方後円・50	横穴式石室	1	前壁	矛を転用	壁面に取り付けた状態で出土
Ｃ２類	京都府	物集車塚古墳	６世紀中葉	前方後円・約 45	横穴式石室	4	奥壁・左右壁	長頸鏃を転用	奥壁２点・左右壁１点ずつ
Ｃ２類	静岡県	茶屋辻横穴墓群第 13 号墓	６世紀中葉～後葉	玄室長 2.5・奥壁幅 3.5	横穴墓	2	奥壁	鉄鏃	
Ｃ２類	熊本県	尾足横穴墓群第２号墓	６世紀後葉	玄室長 3.28・奥壁幅 2.5	横穴墓	2	左壁・右壁	鉄鏃	
Ｃ２類	神奈川県	久地西前田横穴墓群第２号墓	６世紀後葉	玄室長 2.7・奥壁幅 3.7	横穴墓	1	右壁	鉄鏃	
Ｃ２類	神奈川県	城山横穴墓群第２号墓	６世紀後葉	―	横穴墓	2	前壁	鉄鏃	玄室の詳細は不明
Ｃ２類	福島県	大窪横穴墓群第８号墓	６世紀末～７世紀前葉	玄室長 2.7・奥壁幅 3.14	横穴墓	2	前壁・奥壁	鉄釘	
Ｃ２類	福島県	新田横穴墓群第３号墓	６世紀末～７世紀前葉	玄室長 8.45・奥壁幅 3	横穴墓	4	天井	鉄鏃	
Ｃ２類	福島県	舘山横穴墓群第２号墓	７世紀前葉	―	横穴墓	2	奥壁左右隅	鉄釘	玄室は崩壊しているため不明
Ｃ２類	福島県	駒板新田横穴墓群第５号墓	７世紀	玄室長 4・奥壁幅 2.54	横穴墓	2	天井	鉄鏃	
Ｃ２類	神奈川県	間際根横穴墓群第５号墓	７世紀	玄室長 3.27・奥壁幅 3.37	横穴墓	2	右壁・左壁	鉄鏃	左右壁１点ずつ
Ｃ２類か	福島県	中田横穴墓群第１号墓	６世紀後葉	玄室長 2.6・奥壁幅 2.8	横穴墓	不明			４方の壁面に 31 孔取り付け痕が認められる
Ｃ２類か	神奈川県	溝口西耕地横穴墓群第１号墓	７世紀前葉	玄室長 3.5・奥壁幅 2.4	横穴墓	不明			壁面に取り付け痕が認められる
Ｃ２類か	宮城県	迫戸地区横穴墓群第２号墓	７世紀前葉	玄室長 3.4・奥壁幅 3.1	横穴墓	不明			壁面に取り付け痕が認められる